

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	日本ギリシア語文学会の歩み : 学会創立の背景、三十周年にむけて
Author(s)	浮田, 三郎
Citation	プロピレア , 25 : 1 - 5
Issue Date	2019-08-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048239
Right	Copyright (c) 2019 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	



日本ギリシア語ギリシア文学会の歩み

——学会創立の背景、三十周年にむけて——

浮田 三郎

日本ギリシア語ギリシア文学会会長

0 はじめに

今回は、これからの本学会の発展のために、本学会の創立とその歩みについて述べてみようと思います。

1 夜明け前

1976年（昭和51年）頃のことです。関本至先生は、広島大学を退官後、広島文教女子大学教授に就任され、また丁度浮田がギリシア留学を終えて広島大学文学部言語学研究室の助手を拝命した時期でしたが、現代ギリシア語関係の研究会を広島の地で、というお考えを既に温めておられました。

年号が平成に変わる頃、ギリシアに興味を持つ若い学生たちが次第に増えてくるのを心強く感じられた関本先生は、浮田に「何か現代ギリシアの研究会を創りませんか？」と提案されました。これが発端となり、研究会発足に向けての具体的な準備が始まりました。

基本的な考えは以下のようなものでした。

- (1) ギリシアの研究会を目指す。必ずしも語学だけに限らず、できるだけ幅広くギリシア文化全般に関する論考を扱う。また、時代も現代や古代に限定せず、所謂「ギリシア」を対象とする研究や報告などとする。
- (2) 名称は「ギリシア語・文学研究会」。略称「ギリ研」は、教え子や後輩たちが協力して創り上げるので「義理研」にかけている。
- (3) 会長：関本至、副会長：竹島俊之（関本先生の教え子、当時広島大学総合科学部）、世話役：その他の教え子たち、という体制にする。

(4) 研究発表会の開催と会誌の発行を目指す。

2 第一回研究発表会開催

1989年7月9日広島大学にて「ギリシア語・文学研究会」の第1回研究発表会を行ないました（ちなみに7月は関本先生の誕生月です）。3名が研究発表を行ない、続くシンポジウムでは東京とアテネの研究の現状が紹介されました。料亭「まるまん」での懇親会では、当時もギリシアで人気のあった「否定アルニシ (ἀρνιση)」(詩：ヨルゴス・セフェリス、曲：ミキス・セオドラキス)を浮田が独唱しました。

3 『プロピレア』創刊号

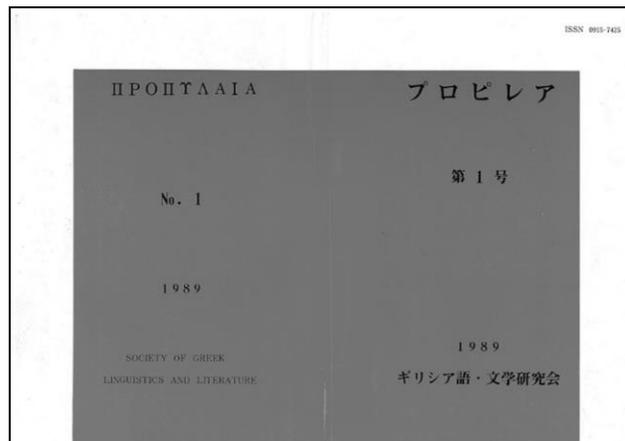
1989年12月25日に研究会誌『プロピレア(ΠΡΟΠΥΛΑΙΑ)』創刊号が発行されました。執筆者は8名でした。

この雑誌名は、竹島俊之先生の案が投票により採択されたものです。『プロピレア』1号、p. iiに「プロピレアは神殿に入る門を示す、したがってそれはちょうど日本の寺の《山門》に相当するものである。しかし建築構造に目を向けるならば、《楼門》が訳語としてはふさわしい」と説明されています。



(<http://dim-galat.pel.sch.gr/projects/akropolis/images/athens4.jpg>)

表紙のデザインは浮田のアイデアに依ります。青空を背景としたアクロポリスの前門プロピレアの白い大理石をイメージしたもので、表裏表紙を広げると、目の前に白い門が浮かび上がるデザインになっています。この「青」と「白」の対照の妙を生かすべく二色刷となりました。



会費と執筆者負担については、なるべく押さえて参加者を多く募ろうということで一致しました。

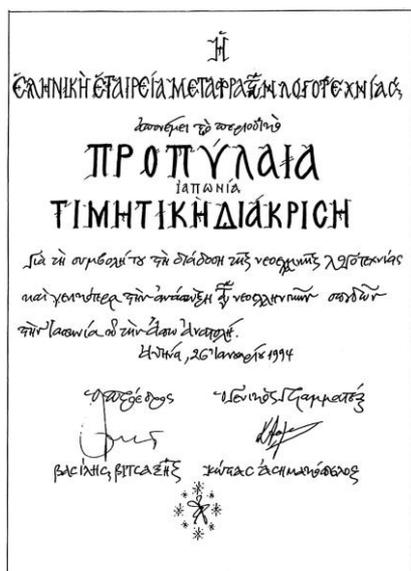
4 ギリシア文学翻訳者協会賞（奨励賞）受賞

1993年、『プロピレア』が「ギリシア文学翻訳者協会」の「奨励賞」を受賞しました。翌1994年1月26日アテネ、コロナキ地区にある古代ギリシア・キクラデス美術館にて授賞式が行なわれ、浮田（当時本会副会長）と佐藤りえこさんが出席しました。大使館で、特に橘孝司さんのB・コンスタンディノス詩の翻訳が評価されたと聞きました。

このときの模様は『プロピレア』5号 pp. 95-98 に報告されています。表彰状と授賞式の写真、それに時間の関係でごく一部しか披露できなかった「幻のスピーチ」の全文が掲載されています。



授賞式での筆者（右）



「ギリシア文学翻訳者協会」は、日本の『プロピレア』誌に対し、現代ギリシア文学の普及、並びに、広く日本及び極東における現代ギリシア研究発展への貢献を讃えて「奨励賞」を授与いたします。
1994年1月26日アテネ
ヴァシリς・ヴィツァクシス
コスタス・アシマコプロス

5 日本ギリシア語ギリシア文学会

1997年度より「研究会」から「学会」へ名称を改めました。『プロピレア』はすでに8号まで発行されていました。

学会として登録することで、研究発表会と研究会誌／学会誌の発行、という定期的な研究活動として正式に認知される利点があります。

また、名称が学会であれば、所属研究機関等からの出張旅費が補助されやすいという切実で実際的なメリットもありました。

元駐日ギリシア大使コンスタンディノス・ヴァシス氏からは「プロピレアは日本で唯一の学術的な学会誌だ。発行を楽しみにしている」といつも激励していただきました。その後も歴代大使からおことばいただき、気を良くして、大使館にも雑誌を届けに行ったものです。

6 巨星逝く

しかし、その間悲しいこともありました。

1993年5月、初代会長関本先生がご逝去されました。

我々学会員は、大学、各界の諸先輩、多くの卒業生と共に、別れを惜しみました。長年『プロピレア』を導いてくださった関本先生が上記「奨励賞」の喜びを私達と共に分かち合えないのが口惜しくてたまりませんでした。

さらに、時期は降りますが、2006年8月に第二代会長竹島先生が、2017年5月には屋台骨の一人古浦敏夫先生が鬼籍に入られました。こうして、本会は創立時以来の実質的、精神的な支柱を次々と失うことになってしまいました。

7 低迷期

2000年（『プロピレア』12号）ごろから2006年（同18号）ごろまで、研究発表会が開かれず、寂しい状態が続きました。運営の協力体勢が弱体化したことが大きな理由です。学会員の住所録の管理、学会の活動の体制、研究発表会の場所、発表者と参加者の募集等は、井浦伊知郎さんがほぼ全体を手配し活動していましたが、自身の就職問題等で、難しくなりました。

2007年～2009年は研究発表希望者がなく、『プロピレア』も発行できない状態に陥りました。

2010年になってようやく、「竹島先生追悼号」として先生の思い出を特集した『プロピレア』19号を出すことができました。

8 復活に向けて

続く2011年～2013年も研究発表者はありませんでしたが、「雑誌だけでも出版しよう」と、浮田、橘孝司さん、佐藤りえこさんが集まり、会の活動について相談しました。その際、以下のような点が議題に上りました。

- (1) 学会運営の体制と浮田退職後の学会本部の所在。
- (2) これからの本学会を如何に続けるか（会員の減少）。
- (3) 手元にある資金（会費と有志の方々の寄付金）を如何にするか。
- (4) 水谷智洋先生、志田信男先生からの励まし。
- (5) プロピレアの発行形態——紙雑誌か電子雑誌か。
- (6) 広島大学学術情報リポジトリ（電子図書館）への掲載が継続できるかどうか。

9 新戦力と将来（三十周年に向けて）

2014年以降の『プロピレア』執筆者の増加に見られるように復活の兆しが見えてきました。（この点は、例えば24号の編集後記をご参照ください。）

かくして、創設三十周年を迎えた今年2019年、研究発表会を行なうことができ、会の活動を継続していくこととなりました。

このエッセイは、2019年研究発表会（2019年2月10日）での講演の内容を元にしたものです。